

白鳥の野性のカンは 失われていない

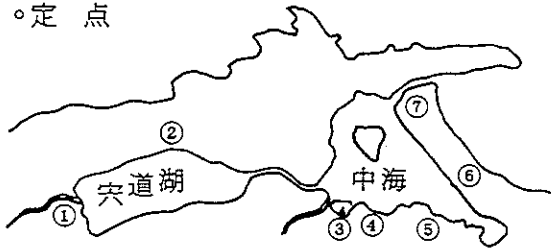
吉野 安久

(1) 白鳥たちはよい住居を求めている。

中海意宇川口にいた白鳥が揖屋湾干拓工事におそれて干拓まん中の中洲の人も犬も来ない所へ移動したが、その干拓も次々と埋った。今年の白鳥は新しい生息地を求めて分散して生息した環境の悪化が野性の白鳥にはピンピンとひびくらしい。

中海穴道湖地区の白鳥定時定点調査結果
(毎月第2日曜日午前10時)

○定 点



①斐伊川 ②秋鹿町 ③揖屋湾 ④意東海岸 ⑤島田湾
⑥彦名干拓(鳥取) ⑦渡(鳥取)

○調査状況 調査参加者(吉野、内田、岩田、根岸、門脇、山本、森田、金山)

調査回	月日	白鳥総数	備考 内訳羽数()内幼鳥
初観	10.12	2	④2 10/26本隊28
第2回	11.10	211	④200(70)⑤10(尾浜工区 コウツチョウ11(7) (内田)1/27 病鳥1(幼)死亡)
第3回	12.8	383	①8(4)②8(4)③316(88)④32(12)⑤7(3) オオハク⑦12(4)
第4回	1.12	381	①7(4) ②85(20) ④278(85) ⑤4 ⑦7(3)
第5回	2.9	407	①コウツチョウ10(金山)④385(60)(オオハク2)⑦12(4)
第6回	3.9	51	①16(5) ③31(5) ④4(2)
第7回	3.10	48	③48 午後6時確認3/11早朝飛去
第8回	3.11	5	①4(0) ①1(1) ④は病鳥3/12までいて飛去
第9回	3.27	4	①4(0) 斐伊川口にいる4羽3/29にはみえず(金山)

(2) 白鳥の野性のカン失われていない。

意東海岸で餌づけをはじめて9年、もう車の音にもカメラにも恐れがない。餌も手でやれる位の近くで悠々としている。上図の③意宇川口へ度々白鳥の調査に行く。これは全くの警戒体制である。150mに近よると全員頭を上げる。100mになると沖へ移動をする。観察と調査は双眼鏡にたよる他はない。瓢湖でも周辺の左

潟などではやはり近よれぬだろうと思う。

シベリヤ北部からの長い旅。自然のきびしさ、タカの襲撃。風雨、餌とせいいっぱいに自然とたたかっているのであろう。雛に生れてから数ヶ月で遠い日本への旅立ち、野鳥の運命とはこんなきびしいものである。意東海岸に来る400羽の白鳥たちの5ヶ月。私たちはここでこそ安息の地にしてゆっくり羽を休ませたい。しかし穴道湖も周囲は殆んどみんなコンクリートの岸壁になって砂浜辺もない。中海はハゼもつれない水の汚染、干拓に追われる昨今。斐伊川口、意宇川口、島田、など人もよせつけない野性の警戒体制である。《野性の白鳥と私たちの愛情の接点が意東海岸である》餌づけの問題の論議の前に一握りの愛情のこもった餌を。野性のカンにピリッと響くものをみつめたい。

(元意東小校長)

野性鳥獣の餌づけについて

山本 良 征

最近、自然保護協会が野性鳥獣の餌づけについての調査結果を発表した。これによると「猿や白鳥、小鳥など、野性鳥獣への餌づけが、保護に役立つという現在の通念は誤解である。むしろ自然破壊の行為であり、また真の保護である生息環境の保全の貧しさのかくれみのになっている」として否定している。野性のものは野生に。という思想については反対するものではない。しかしながら放っておいても現状では維持出来る鳥獣は今の日本にどれだけいるのだろうか。特に白鳥の場合、その数の激減も予想される。他にいくらかでも安住の生息地があれば、野性のままでおくべきであろう。しかし、今の日本、この汚染列島で、彼女らにそれをどこに求めようと言うのであろうか。野性鳥獣について、我々は真剣に考えなければならない時期に来ていることは確実である。水鳥を愛する会の目的でもある。私たちは総力をあげてその保護に進もうではないか。